日高

有吉佐和子

有吉佐和子

日高川

日高川

著者　有吉佐和子
装幀者　星奈美
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

印刷　凸版印刷
製本　中島製本
函　加藤製函
定価　四九〇円

昭和四十一年一月二十五日　第一刷
昭和四十三年十二月二十日　第六刷

©1966 Sawako Ariyoshi Printed in Japan

有吉佐和子

日高川

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

日

高

川

一期一会

一

長い昏睡状態から醒めたとき、湯本深雪が最初に云った言葉は、それからずっと長い間、龍神村の人々が語り伝えたほど、いかにも彼女の性格を物語るのにふさわしいものであった。

「まあようけ集ってある。私は死ぬと思われたんやのう。こんな時代に、こがいに人間が折角この山奥に集ったにのう、生き返ってしもうてはわややったわの」

深雪の髪はまだ白髪と呼ぶには遠かったし、肌は抜けるように白くて、半世紀も前に龍神小町と呼ばれていた頃の面立ちは今も少しも損われていなかった。形のいい口許からこぼれ出る皓い歯は、彼女の年齢をきいた者には信じられないことなのだが、義歯ではないのである。あれほどの美貌だったのだから終生男を知らずじまいということはなかろうと眇で深雪を眺めたものも、髪も染めていないし、歯も医者に診せたことがないと知ると、思わず姿勢を改めて、その処女性に平伏してしまうのであった。

もっとも深雪の方では、そういう話が出ると、開けた口を手で掩うこともせずに笑い飛ばして、

「龍神温泉には鉄分がありますさか、血が紅うなって、髪も黒いまんまでいてますのやろ。温泉の湯を呑んで育てば、カルシウムに事欠きませんさか、歯もいたみませんのえ。私が若いとなら、私が美しいとなら、みんな龍神温泉のおかげですさか。昔から寒川男に龍神女といいますわ。龍神温泉に浸れば色白でしなやかな肌になるのは三日で気がつきなさるでしょうが

の。ま、お帰りなしたら、龍神温泉に浸った女は齢をとらんと、よう宣伝して下さいねえ」

と、商売の方に話をそらしてしまうのであった。

龍神温泉の大黒屋といえば、上御殿、下御殿と等しく龍神村では格の高い温泉宿であった他に、昔は高野山まで他家の山を踏まずに行けると云われたほどの山持ちでもあった。そこで生れて七十余年、二人の姉は狐の嫁入りと謳われるほどの豪勢な支度をして、和歌山県外に良縁を得て片附いたのに、末娘の深雪ひとりが、ずっと大黒屋を守り続けている。姉たちに勝った美貌が山深い温泉宿の、軒深くに隠れ続けた不思議は、様々な臆測を生んだが、歳月は不逞な想像をようやく押し流して一切謎として残してあるだけだ。その謎は、今では龍神温泉の名物にもなっていた。

それだけに深雪がある日、突然倒れたときには日頃の健康が若い者も顔負けするものであっただけに、龍神村の人々を慌てさせた。隣接する山路という字に棲む医者が呼ばれたのも、郵便局員が自転車を飛ばして湯本家の縁戚に電報を打ちに南部行きのバスを追いかけたのも、あっという間の出来事である。

医者は脳溢血と診断したし、家のものもすぐそうと悟って、寝室は深雪の倒れた「月」の間と呼ばれる客室の中では一番広い座敷からそのまま動かさずにしつらえられた。こういう病気は病人を動かすのが一番悪いと云われていたからである。

深雪は四日四晩というもの瞼も動かさずに昏々と眠り続けた。その間に、田辺町や御坊町などの和歌山県下に散っていた縁戚ばかりでなく、遠く東京からも続々と人が集ってきた。

瞠いた眼が次第に視力を恢復してくると、深雪はその一人一人を、こればかりは年寄りらしく潤んだ眼で見詰めて、その都度小さな驚きを示した。

「まあ、えらい騒ぎやったんやのう。諸々方々から集ってあるわ。こんなことしやいでも、七十過ぎた婆が死ぬのに何の不思議もないのによ。私の方は常日頃、お傭さんたちに口癖のように云うてますやろ。客をもてなす心は一期一会や。相手の生涯にも自分の生涯にも、このとき限りが縁なんやさか、相手も自分も大切に思うのが茶の道で人の道ですわ。後になって別れてから、ああしもうた、こうすればよかった、あれを云うとくべきやったと思い残すことのないように、私はいつかて一期一会と思うて暮して来ましたさか、死ぬとなっても誰の顔見たいとも思わんのよ。しかし、こがいに云うては身も蓋もないわのう。折角山坂越えて来なしたんやよって、ゆっくり温泉に浸って骨休みしていって下さい。恰度、避暑の季節やして。どうで助かったところでこの齢や、私も近いうちですさか、ついでによう顔みて、ま一度来る気は起らんようにしておくことや」

細い美しい声であったが、中風患者特有の饒舌が続いた。山路の医者はずっと大黒屋に泊りこんでいたのだが、深雪の様子を見てとると、次第に眉を開いていった。饒舌に前後の混乱がないし、舌のもつれる心配もない。安静に過させれば、元の躰に戻るだろう。

「広瀬先生」

そのときだけ病人らしい声を出した。

「ほんまに私は助かってしもうたんですか」

それは心細げにも、しかし懸命にいのちに取りすがっているようにも聞こえた。

「もう大丈夫ですわ。しかし躰に無理したらいけまへんで。一遍に多勢と話す気は起さず、誰どひとりを相手に、ゆっくり話して、疲れたら眠って、麦の入らん粥炊いて、鶏卵を食事の度に一個ずつ上がって下さい」

「はい」

「どれ」

医者は晴れやかに人々を見渡してから云った。

「儂も久方ぶりに家に帰らしてもらいましょうかいのう」

医者が帰ると云ったので、深雪ばかりでなく、枕許に集っていた人々は一様に安堵の吐息をついた。本当に大丈夫なのだ、泊りこみでいた広瀬先生が帰るというのだから。

「あんた、どなた？　あれ三郎さん、東京からかいし」

「うん、工場へ電報が来たんですよ。家で気を利かしてくれたのかと思って帰ったら、本当にお婆さんが危篤だというで吃驚した」

「工場って？　あんた帝大へ行ったんでしょう？」

「入学したのは東京帝国大学ですけどね、学徒動員という奴で毒ガス工場へ行かされてるんですよ」

「毒ガス作ってるんですか、あんた」

「化学薬品工場なんですよ。火薬みたいなものを作っているらしいんだけれども、製造過程で毒ガスが出るんで胸をやられるものが続出してるんです」

「まあ、のう。挙国一致のときですよってに仕方がないことかもしれんけど、並より弱い躰やった三郎さんが空気の悪いところで我慢して働かんならんのも、御時勢やのう。けどもあんた、躰は大事にしなさいや」

「休暇は出ないのでね、時々電報を打ってもらって休むんです。ソフキトクなんてね」

「あんた、お祖父さんは居てやんのに」

「偽電報ですよ。近親の急病と死亡以外には休暇がとれないんです。僕は家に帰ってから、すぐソフシスと打って、六日休んだ」

「ほなら私もその伝で殺してしもうて、ゆっくりしたらええ。何は無うても空気がええところやさか、命は延びる筈や。昔のよに遊んで行きなさい。知世さん」

深雪は知世子を呼ぶと、

「あんた広瀬先生をお送りして、ついでに誰どに電報打たせにやってよ。ババシス、カエレヌ、サブロウとのう」

知世子が黙って立ち上ろうとするのを滝津三郎は目顔で呼びとめた。

「僕も一緒に行くよ」

温泉寺の隣家に預けておいた自転車に乗ると、風呂敷包みをハンドルにくくりつけてから医者は三郎と知世子に会釈を残し、飄々として行ってしまった。

道が白く浮き上って見える。まだ昼日中だというのに、杉木立の高いこの山峡の村にはもう薄闇が漂っている。医者の自転車がその奥に吸いこまれたように見えなくなると、若い二人はばつの悪そうな顔になってしばらく方途に迷った。

「空が細い。まるで紐のようだ」
三郎が仰向いて云った。
濃緑の穂先のような杉木立が道の両側に隙間もなく伸びて、二人の頭上にくっきりと細く一本の空を描き出していた。それは碧く澄んで遠くあるようにも、また手をのばせば掴みとれるほど近くにあるようにも見える。知世子もつられてそれを見上げながら、いつか深呼吸をしていた。お婆さんは助かったのだ、という思いがまた新しい。
「ババキトク、スグカエレ」という電報を受取ったのは四日前の午後であったが、それは知世子の場合滝津三郎のような冗談事など思いも浮かばない一大事であった。今日まで、深雪の枕辺に集った人々は皆それぞれ深雪とは血縁関係にある者ばかりである。滝津三郎にしても、深雪の甥の三男なのであった。東京育ちの病弱を深雪が預って小学校の二年生から三年間この龍神で山の子たちと同じように過させた。蕁麻疹を起し易かった体質が、温泉の効能でか直ってしまったのを、親たちは今でも感謝しているようであった。三郎自身もそのときの大叔母の親切が忘れきれずに、わざわざ東京から駈けつけたのに違いない。
だが知世子の場合は違っていた。生れ落ちたときから、まるで深雪の孫のように大黒屋の中で育ってはいたものの、知世子は大黒屋のお傭さんの子なのである。お傭さんというのは、女中を呼ぶこの地方の方言であった。深雪の気に入りのお傭さんが、川上村の筏乗りに嫁入って、妊ると同時に夫に先立たれ、それからは大黒屋に舞戻って深雪の庇護の許に出産したのが知世子であった。名付けたのも深雪である。知世子の母親は、夫を失った衝撃に出産の過労が重なったためか産褥熱で間もなく死に、だから知世子には両親の記憶がない。そのかわりには深雪一人が母であり父であった。小学校の成績がずば抜けてよかったので、お傭さんの子としては破格の田辺高等女学校にまで進めることができたのも、みな深雪のおかげであった。だから、深雪を失うことは、知世子にとっては総てを失うことに等しかった。この四日四晩というもの、知世子ほど心細い思いをして過した者は他にはなかっただろう。
すぐ足許に、湯の音がきこえていた。
弘法大師が夢に難陀龍王のお告げをきいて湧くを知ったと伝えられている龍神温泉が、二人の立つ道の下の岩窟から湧き出て、すぐ横に建てられた浴室まで樋を伝って流れる手前に、共同洗濯場があって、湯はそこへ常時流れ落ちている。
湯煙が霧のように二人のいる道の上にまで棚引いていた。知世子の肩に、ふと三郎の手が置かれた。知世子は一瞬呼吸が止まったように思った。ああ、と喉の奥から声が洩れたような気がする。全身の血が逆流して、三郎の手の下に激しく集って行くのが感じられた。足がふらつくのを、知世子は歩き出すことで三郎に気取られまいとした。
「お薬師さんへ、お礼詣りせんといかんわ。毎日温泉寺と皆瀬神社を駈け歩いてお頼みしてたんですもの」
知世子は温泉寺への急傾斜した石段を上り始めた。三郎の手がようやく離れた。
一息で石段を上りきって振返ると、三郎は道に立ったまま遠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くを見上げている。紐のように細いと云った空を眺めているのだろう。彼がここで過した頃からもう七年もたっているのだから、この空もきっと懐しいのだろうと思いながら、知世子は民家のような建物の前で奥に坐っていらっしゃる薬師如来像に向って両掌を合わせた。

有りがとうございました。私の願いをお聞き届け下さって、お婆さんを助けて下さいまして本当に有りがとうございました——そう感謝しているつもりなのに、心の中はたった今、三郎に肩をさわられたことで騒ぎ立っている。どういう気で三郎が、そんなことをしたのか、という疑いよりも、知世子がもっと当惑しているのは、ただ手が触れたというだけで、まるで何もかも分らなくなっているような自分自身にであった。

龍神小学校の校庭で、三郎が級長だったので学年の一番前に立って、行進していたのを、幼い知世子は校庭の外から眺めていたことがあったのを思い出していた。同じ大黒屋で暮していても、男の子と女の子という違いのわきまえがあったし、東京育ちで行儀のよさが目立つ三郎に、お傭さんの子というひけ目からも幼い知世子は自分から話しかけたことはなかった。湯本家の血筋のためか、人形のように整った面立ちと、一際美しい眼許に、知世子が幼い日に憧憬を寄せていたのを、三郎は知っていたのだろうか。

三郎とは正反対に色黒で横幅の広い顔をした薬師如来は、憮然として知世子を見下していた。合掌しているのに知世子の心には、温泉寺も薬師如来も、深雪の恢復を喜ぶ気持さえ宙に浮いてしまっている。

もんぺ姿は、三郎の眼にはどんなに田舎女じみて映るだろうかと気にしながら、知世子は今朝白衿をかけかえたことだけを気休めに、それでも衿許に手をやって整えながら階段を降りた。三段ほどのところでよろめいたのを、三郎が手を出して支えてくれたが、本当によろめいたのか、故意に足を曳いたのか、知世子にもよく分らなかった。

黙って大黒屋に戻る道で、知世子は耐えきれなくなって喋り出していた。

「私、三郎さんがおいでたと聞いたときは耳を疑うたんですよ。東京から、まさかと思うたし、それに何年も音沙汰なしやったでしょう。とうの昔に龍神もお婆さんのことも忘れてしもうてなさるとばっかり思うてましたもの」

「こんな山奥の生活なんて、都会の人間には想像もつかないものなんだよ。それだけに、実際に暮した人間たちは都会へ戻った後は強烈な記憶になるんだ。忘れられるものじゃないさ」

「……そうですか」

「そりゃ東京から出かけて来るには億劫なところだよ。南部からバスに乗って五時間半もかかるんだからな。山道を急カーブするときは、後の車輪が一つ崖の上に浮いていたりしてね、まるで命がけだ。でも僕は後悔もしなかったし、怖くもなかった。東京から、まるで脱走しているような気持だった」

「脱走……?」

「そうさ。いっそこのまま逃亡してしまいたいというのが僕の本音だよ。嫌な世の中になったからね。学徒報国隊、報国会、報国団。何にでも愛国がついたり、国防がついたり、日本人の

語彙の貧弱さや音感に対する感覚の悪さには参っちゃうよ。フランスではね、政府が文化省の中に特別に国語を守るための部門を持たせて、国家で言葉を大切にしているんだよ」

知世子は返事のしようがなくて当惑していた。このひとは、とんでもない非国民なのではないのだろうか。一億が総力を結集して聖戦に参加しているときだというのに、日本語の音感がどうのという三郎の気持は知世子には理解することができなかった。少くとも知世子は、皇国の勝利を疑わなかったし、田辺高女をこの春卒業しても、ひき続いて御坊町にある航空機工場で働いているのは、それが銃後にある者の任務と信じていたからである。

だが今ここでそんなことを口にしては、折角心を開いている三郎の気持を損うように思い、それが怖ろしくて知世子は黙っていた。こんな時代に、口にしてはならないことを口にしているのは、知世子を信用しているからに違いないのだし、山道を歩いて懐しい昔を手繰り寄せると、つい日頃の不平不満が大げさな言葉になって口をつくのかもしれない。三郎も工場へ戻れば、白鉢巻きで旋盤と取組むに違いないのだ、と知世子は思った。

気がつくと、大黒屋の前は通り過ぎていたが、知世子は気がついても慌てずに同じ歩速を進めていた。大黒屋を中央にして、温泉寺と反対側にあるのが皆瀬神社だった。ついさっき三郎に云ったように、深雪の恢復を感謝するために知世子には参拝する義務がある。

「龍神はいいなあ」

三郎はずっと喋べり続けていた。

「温泉も昔のままだし、人も昔のままだ。渓流の音をききながら眠り、水の音で眼がさめるなんて、お婆さんの言葉じゃないが、本当に命が延びるようだよ。人々は昔と同じ柔和な言葉で、昔と同じ話題を持って、いいなあ。東京はこの二、三年で何もかもがらりと変ってしまったのに」

「どんな風に変ったんですの？」

「戦争一色さ。みんながばたばたと落着きをなくして、万歳万歳と大騒ぎしているよ。食べるものに不自由して、それでどうやって勝つつもりなのだろう」

道が急に狭まったと思えるほど太い杉木立が深くなっていた。皆瀬神社の持山に入ったからであろう。知世子は暗い木の下道での会話を振切るつもりで、空を仰ぎ見た。

「あれ見て、三郎さん」

「うん？」

「空が、ほら」

知世子は童女のように指さして見せた。

「細いわ。さっきの空が紐やったら、この辺りの空は糸のようやわ」

それは杉木立の先が描いたものではなく、何か鋭利な刃物が暗く掩う木立の葉を掻き切って見せた線のようであった。空の青さが、眼から全身に突き刺さる。

三郎の手が、知世子の脇を掻き抱くと強く引寄せて、仰向いたままの顔に激しく唇を当てていた。

二

日高川の水音は激しかった。知世子の横たわっている巌の根に、流れが叩きつけられて、その都度あげる水しぶきが、霧のように散って柔かく知世子の躰に舞い降りる。熱い汗に冷たい霧が混って、知世子の肌は滑らかであったが、抗い悶えている彼女の躰は、ただ激しい水音だけしか聞いていなかった。日頃聞き慣れている川の流れも、岩に寝て耳を当てて、これだけ身近く聴いたことはなかったのだし、岩に砕けた水が辺りに谺するのも、知世子は今まで気がつかなかった。水音の谺は、岩から岩へ伝えて地の底へ鐘の音のように響き沈む。山々が口を開いて牙を剝き出したように、日高川には大きな岩石が多いのであった。どの岩も砕け散る飛沫で白く縁取られていた。知世子は時々見える対岸の水と岩の動く文様を、眩暈いのように感じていた。

初めは恥しさで血が狂うようであったのに、いつか思いがけない波のうねりが躰に充ち溢れ、知世子は陶然として三郎の好むままに躰を任せていた。何が起ったのか、どうして起ったのか、そしてどうなるのか——そういうことを考えようとする気持が一番早く麻痺してしまっていた。今、何が起っているのかということさえ、知世子には考えられない。背中が岩に当るのも痛いとは感じられず、三郎の呼吸が耳に近くなったり遠くなったりするのも、水音にまぎれていた。三郎の躰が重く知世子に掩いかぶさり、動悸が胸から胸へじかに伝わって来たとき、知世子はようやく二人の躰が一つのものになっている実感を覚えたが、腕も脚も力が失せて、どこの関節もだるく、このまま日高川の渓流が裂けて、岩もろとも二人を呑みこんでしまわないかと、そんな投げやりなことを思うともなく考えていた。

「白いんだねえ、君」

三郎の讃嘆が、まるで鞭のように知世子を現実に引戻した。

「あ」

いつの間にか全裸になって岩の上に寝ていたのだ。知世子は引きちぎられたように草にかかっている紺絣に腕を伸ばした。

「隠すことはないじゃないか。本当に綺麗だよ。君、自分でもそう思わない？」

男の中では温和しい性格だとばかり思っていたのに、その三郎が都会でどう成長したのか。皆瀬神社を素通りして、この小原谷まで知世子はただ三郎の逞しさに引摺られて来たようだったのを思い返した。

「でも」

知世子は起した上半身に紺絣の上衣を抱きしめて、三郎の棚長で鋭い眼を避けながら、ようやく抵抗した。

「筏が来ますよって……」

三郎もようやく我に返って、屹とした視線を川上に投げた。

「こんな時間でも？」

「まだ昼ですもの。それに、発電所の筏通しの中は電気が点ってるので、この頃は夜中でも筏が通りますって」

「筏から、ここが見えるかなあ」

「躰を伏せてたら見えやんでしょうけど」

云ってしまってから知世子は頬を赭らめた。つい今までの二人の姿態を思い出したからであった。
「知世ちゃん」
「あ」
「龍神に来て、君に会えたのが一番嬉しかったんだよ、僕は」
「本当……？」
「会えるとは思っていなかったんだ。大黒屋の薄暗い玄関に君が出てきたとき、この顔がまるで浮かび上るようでね、僕はそのときふらふらっと吸い寄せられるようになった」
「私もあのときは思いがけなかったので……茫としてましたわ」
「都会に疲弊している人間には、君は救いの女神のようだよ。君は渓の水を飲んで、山の空気を吸って育ったのだものね。躰の中のどこにも文明の垢が濁っていない」
「いややわ、田舎者、田舎者って云われてるような気がする」
「田舎で君のような綺麗なひとに会えるなんて、ちょっと誰も思わないだろうな」
「私ら、駄目ですわ。お婆さんが若い頃は、ようそない云われて龍神温泉の名物だったという話ですけども」
「お婆さんの温泉自慢は、君を知ったら本当だということが分ったよ」
ようやく上衣に腕を通したところで、三郎は知世子の胸を掻きわけて顔をうずめた。
「柔かい。温かい。肌理が細かいとか餅のようだとかいうのは本当に真実に近い表現なんだね」
乳房を三郎の繊細な指が揉むと、知世子は喉から声が洩れて、また岩に倒れかかった。しぶきに濡れた岩肌は黒く、その細かい襞の間から鮮かな緑の杉苔が吹き出していた。三郎の唇が、知世子のひらいた躰に当る度に杉苔が揺れ動き霞んで見えたりする。いつか知世子は片頬の下に柔かな苔が触れているのに気がついた。
「素晴しいね」
三郎の声が耳の傍で囁いている。
「え？」
「筏だよ」
「ええッ」
川上の殿垣内あたりから流してきた筏が、いま二人のいる岩の下を通り抜けるところであった。山から伐り出した材木を十四尺の長さのものを七尺の幅に組んで、貨物列車のように幾つも繋げたものを、二人の筏師が、初床に乗って楫をとり、水竿を操って日高川を川下の御坊町へ下って行く。岩の多い激流を筏で下るのは水竿八年櫂三年と云われるほど技術のいる難しい仕事であった。迂回する川瀬の強いところでは筏の鼻が岩に激突する寸前に筏乗りが岩に飛上って竿で筏を突き、方向を変えた筏にまた飛降りて川をくだるという飛燕にも似たわざが必要であった。それだけに日高川で鍛えた筏乗りは、毎年鴨緑江に出稼ぎに行って、そこでも一層名を高めている。

佐井の鳴滝　山路の檜皮
筏乗りゃこそ

見て通る

龍神村を通る日高川は水音こそ高いけれども、歌に唄われるほどの難所ではないので、筏乗りたちはのんびりと筏唄を唄い始めた。岩に躰を並べて伏せていた二人は、ほっとして顔を上げた。

「幾つ？」

「え？」

知世子が童女のような微笑を浮かべているのを、三郎はいぶかしく見た。質問の意味が分らない。

「筏のね、床が幾つあったかって、子供のときよく数えっこしたでしょう」

「ああ」

三郎は驚いて、

「君、数えていたの、今？」

と訊いた。

「ふん。十三あったわ。上荷があったよって、五十石ぐらいの筏やったでしょう」

紺絣の上着にもんぺの紐をきりっと締めてから、知世子は髪に手を当てた。二つに分けて三つ編みにしたのが、まるで、水に浸けたように、ぐっしょりと濡れている。先を縛ったゴム紐の端を引張ってとると、ゆっくりとほぐした。歯の短かい細い櫛を、上手に髪の先に編みこむのが、このごろ工場で働いている娘たちの間で流行している。非常時で装うことが禁じられても、お洒落な心は隠れん坊でもしているように面白く様々な流行を生んでいるのであった。

飴色のセルロイドの櫛を取出すと、指先で三つ編みをほぐして、知世子は髪を梳き始めた。女学校に入ったときから一度も切ったことがないので、髪は腰の辺りまで長い。

シャツの裾をズボンの中に押しこみながら、三郎は岩の上で髪を梳く知世子にあらためて見惚れていた。

「ローレライみたいだよ」

「え？」

「ローレライを知らないのかい？　ほら歌にあるじゃないか。ライン河の伝説だよ」

「ああ、美わし乙女の岩に立ちて、というのね？」

「そう」

なじかは知らねど　心わびて
むかしの伝説は　そぞろ身にしむ
さびしく暮れゆく　ラインの流れ
入日に山々　赤く映ゆる

美し乙女の　巌頭に立ちて
黄金の櫛とり　髪のみだれを
すきつつ口ずさむ　歌の声の
くすしき魔力に　魂も迷う

こぎ行く舟人　歌にあこがれ
岩根も見やらず　仰げばやがて

波間にしずむる　人も舟も
くすしき禍歌（まがうた）　歌うローレライ

（近藤朔風　訳詞）

三郎の吹く口笛に、小声で歌をあわせながら、途中で知世子は櫛を止めた。

「どうしたの？」

「私のお父さん、ローレライ見たんと違うかしらん……」

「ああ、君のお父さんは筏で……」

「ええ、さっきの歌で唄うてた佐井で死んだんです。あの辺りが今でも日高川一番の難所やから。筏から岩に飛ぶとき、足でも踏み外したんやろうて人は云うてなさるけど、鴨緑江でも鳴らした腕利きやったのに、筏が自然ともじけてばらばらになったところで死んだりする筈はなかったって、川上村の叔父さんらは今でも云うてます。なんで死んだんか不思議やって」

「もし、ローレライを見たのだったら」

三郎は、川上から川下の急流が、次第にきらきらと輝き始めているのを眺め渡してから、まだ遠くに視線を当てたままで云った。

「君のお父さんは幸福だったと思うよ」

「あら、どうして？」

「僕が筏乗りだったら、さっきの筏にここから飛降りて、岩にぶつけて死んでしまったと思うからさ」

「なんで？」

「分らないのかい？」

「……」

「美しいものを見てから死ぬのなら、男は本懐だと思うよ」

「……」

「少くとも、機関銃なんかでバリバリやられて、万歳なんて云って死ぬより、ずっと詩情があるじゃないか。僕らの仲間にもどんどん赤紙が来てるんだぜ。学徒出陣なんておだてられて、最前線へ送り出されてさ、ジャーナリズムというのは不愉快だねえ。つい昨日まで学生狩りなんかしていた連中がだよ、同じ口で学徒出陣って新語を作り出すんだから、浅薄なものだよ。むりやり戦争に引張り出されて殺されるよりも、こんな大自然の中でローレライを見ながら岩に砕けて死ぬ方が、ずっと素晴しいよ」

「嫌やわ、そんな考え方」

知世子は眉をひそめた。

「死ぬなんて、死ぬときまで、ぎりぎりのときまで生きることを考えるべきやと私は思いますわ。死にたいとか、死んだ方がいいとかいうのんは、生きていることを冒瀆するものやと思いますわ。ローレライを見たんなら、岩へよじ登ってローレライを摑まえやないかんのやわ。死んでしもうては何もなんぬ。死ぬときは、みんな一緒に死んだらええんですわ。私は、一億玉砕という言葉、大好き」

知世子の口調の激しいのに驚いて聞いていた三郎は、途中から笑い出した。

「一億玉砕か」

「何を笑うてなさるん？」

「いいんだよ、知世ちゃん、君には僕の云ってることが分らな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com